IIMAの目　公益財団法人 国際通貨研究所

2015 年 7 月 14 日

原油 60 ドル割れ定着の予兆か？

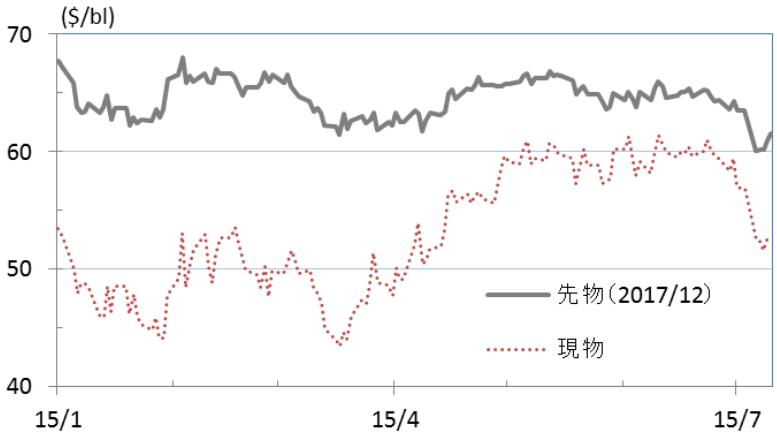
公益財団法人　国際通貨研究所
経済調査部　上席研究員　森川　央

一般に現物や数カ月先の先物と違い期先の先物は流動性が低い分、短期的な投機が入りにくく値動きは小さい。それは原油先物も同じである。米国の代表的原油価格であるウェスト・テキサス・インターミディエイツ（WTI）のスポット価格の今年の最安値は 44.02 ドル、最高値は 61.36 ドルで、差は 17.34 ドルである。それに対し期先（2017/12 月）の最安値は 60.19 ドル、最高値 68.04 ドルで値幅は 7.85 ドルである。

図から読み取れるように、期先は 65 ドル前後で安定していた（今年の平均は 64.5 ドル）。1 月と 3 月、現物が 40 ドル台に下落した時期でも、61 ドルを割ることはなかった。基本的に先物市場は需給の緩和は一時的で、穏やかな原油先高観を共有していたのである。

しかし、先週になって変化が現れた。現物はまだ 50 ドル台であるにも関わらず期先は 60 ドル台に下落、ギリシャ情勢が一応の決着をみせリスクオフが一段落した 13 日になっても反発が小さく従前の平均 65 ドル近辺には届いていない。一見、小さな変化にしか見えないが、中国経済の減速、大詰めを迎えているイラン核交渉という中期的な需給要因が価格の長期的な見通しを押し下げだした可能性がある。目を凝らしておく必要があろう。

原油価格（WTI）



(資料)Thomson Reuters

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべて御客様御自身でご判断下さいますよう、宜しくお願い申し上げます。当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、その正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されております。全文または一部を転載する場合は出所を明記してください。